

第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活②

出合いに助けられた抑留生活

五十嵐甚吉さんのお話から

○気屯 現スミルヌイ

フ。樺太中部の町。表紙

裏地図

○シベリア 表紙裏地図

○満州 中国東北部。

私は十九歳で樺太の気屯に行かされました。そこで新しい少年兵を教育したりする仕事につきました。やがて戦争が終わって日本に帰れると思つていましたが、シベリアに連れて行かれ、とてもつらい仕事をさせられました。日本が無条件降伏をしたので、ソ連は日本の領土であった樺太の半分をよこせ、北海道も半分よこせという無理な要求を出してきました。そのうちに、樺太や満州にいた日本の兵士が取り押さえられ、シベリアに連れて行つて強制労働をさせたのです。これがシベリア抑留です。

その頃のソ連では、ドイツと戦争していたために多くの兵隊が戦死しました。そこで、国を立て直すために、日本兵をシベリアに送りこみ働かせたのだと思います。

収容所へ移動するときも、食料が満足に当たらないので、途中でどんどん仲間が死んでいきました。健康な者は移動中の休憩中に、どこかに食べるものがないかと探しました。元は農家だった人たちが「これはホウレンソウだから食べられる。これはミツバだ、これも食べられる。」と教えてくれました。

ところが、体の弱い人達は大変でした。休憩の時は横になって寝ているばかりで、自分から食べるものを探さうとしないのです。初めは仲間が「少しでもいいから食べる。」と食べものをあげていましたが、何日も移動しているうちに、みんな自分の体を守るだけで精一杯になつて、仲間と与える余裕がなくなりました。ソ連側からも食料はわずかなパンの切れはしでした。体力のないものから結核という病気にかかって亡くなりました。遺体は野原に穴を掘つ

○結核 結核菌が引き起

こそ伝染病。特に肺にかか
ることが多く、かつては命を落とすことが多い病
病気であった。

て埋めました。収容所で亡くなった人は、夏なら山で土を掘り埋めますが、冬は零下五十度、六十度になるので地面が凍り、十センチの穴を掘るのに何時間もかかりました。春になったら埋めようと、収容所から離れたところに置いてきますが、次の年の春、雪が解けてから行くど、オオカミや森の獣に食べられて死体がないこともありました。

収容所では、毎朝六時半に仕事が始まります。零下五十度になる地域にテントを張って寝ていました。せめてもの救いは、燃料が豊富だったことです。こんなに広い国だから、食べ物はなくとも木がいっぱい生えている。木さえ切ってくれば、夜通し火をたいいていられるから命が助かったのです。しかし、食料はそういうわけにはいきません。捕虜が毎日死んでいくのです。ソ連人の責任者が日本人に与える食料を自分の懐に入れて、横流ししていたのが原因でした。これほどの捕虜が弱って死んでいくのはおかしいということ、モスクワから調査員が来ました。調べていくと、食料を与えていないことが分かりました。その責任者は、兵士たちの前で見せしめのため

○捕虜 戦争などで敵に捕らえられた人。



イメージ図

弱った兵士を看病する戦友

○おがくず 木材を切つたときに出る細かい木くず。

にその場で仕事を辞めさせられました。

ある日、私は移動の時に乗っていた馬車がひっくり返って、胸を強く打ち、シベリアに何か所かある立派な病院に入院することになりました。この建物の屋根はテントなのですが、両側に木を合わせてつくって、中におがくずが入っています。それで夜通し火をたいてくれるから暖かく、零下五十度とか六十度でも、この中にいると立派な生活ができます。そして、病人だから食料もちゃんどくれますし、看護も手厚く非常にいい病院でした。私は、たまたまそこへ入院し、二カ月くらいで治りました。

治った人はみんな収容所へ戻されます。私も体が治ったので、今度、収容所から迎えが来たら帰ることになっていました。

しかし、私を担当してくれた女性の医者は、非常にいい先生で、「五十嵐、あなたはこの病院の抑留者たちのリーダーになり、通訳をしながらここで寝泊りをして働きなさい。収容所へ戻らなくてもいい。」と言ってくれました。本当にうれしかった。しばらくして、病院は



少年と五十嵐さんの絵

イメージ図

閉鎖することになり、患者を日本へ帰すことになりました。そして、患者のみんながトラックに乗って帰るときになって、その医者は、「五十嵐、おまえは一生懸命働いてくれたから、この部隊と一緒に帰りなさい。日本に帰ったら日本の軍隊のしきたりに従うのですよ。」と喜んでくれたのです。私は喜んで日本に帰ってきました。

ところが、残念なことに、父と弟は戦死して家族はいなくなっていました。

○開拓団 満州事変後、国策により満州(中国東北部)に送り出された農業移民集団で、合計二十七万人程が入植した。終戦後は、ソ連の参戦で取り残され、多くの犠牲者をだして日本に帰国した。

○舞鶴 京都府北部にある市。

最後に、私が病院にいる時に、入院していた満州開拓団の少年の話をしてもらいます。彼は満州の土地を開拓し、その土地を自分のものにする夢をもって満州にやってきましたが、体調を悪くして私と同じ病院にきたのです。私は彼がかわいくて、自分の寝ているベッドの隣に寝かせては、毎晩話を聞いてあげました。先生が「この少年はもう二、三日でだめだな。」と言いましたが、本人に言うわけにはいきません。「おまえ、国の父さんや母さんに何か言いたいことないか。」と聞くと、「もう一回、母さんのつくった食事が食べたいな。」と言い、それを歌にしてくれました。「じゃあな、その歌を、おれがもし日本へ帰れたらおまえの母さんに必ず伝えるから。」と約束しましたが、残念なことに、我々が舞鶴に着いたとき、アメリカ軍による服装や持ち物の検査で、住所を書いた紙をとられてしまいました。そこで、私は毎回この歌を最後に歌うことになっているのです。

もう一度 食べて死にたい おふくろの手料理
もう一度 飲んで死にたい おふくろの味噌汁

DATA

平成20年度手稲区平和事業

聴き取り

- ・平成20年11月21日
- ・前田小学校



五十嵐甚吉(いがらし・じんきち)さん

- ・大正11年(1922年)生まれ
- ・札幌市手稲区在住